

次の文は、『和泉式部日記』の一節である。恋人を亡くして嘆きの日々を送っている「女」のもとに、「宮」から恋文が贈られるようになった。これを読んで、後の間に答えよ。(五〇点)

かくて、しばしばのたまはする、御返りも時々聞こえさす。つれづれも少しなぐさむ心地して過ぐす。

また御文あり。ことばなど少しこまやかにて、

⁽¹⁾「語らばはばなぐさむこともありやせむ言ふかひなくは思はざらなむ

あはれなる御物語聞こえさせに、暮れにはいかか」とのたまはせたらば、

「なぐさむと聞けば語らまほしけれど身の憂きことぞ言ふかひもなき

⁽²⁾生ひたる蘆あしにて、かひなくや」と聞こえし。

思ひかけぬほどに忍びてとおぼして、昼より御心設けして、日頃も御文とりつぎて参らする右近しやうの尉じやうなる人を召して、「忍びてものへ行かむ」とのたまはすれば、さなめりと思ひてさぶらふ。

あやしき御車にておはしまして、「かくなむ」と言はせたまへれば、女いと便なき心地すれど、「なし」と聞こえさすべきにもあらず、昼も御返り聞こえさせつれば、ありながら帰したてまつらむも情けなかるべし、ものばかり聞こえむと思ひて、西の

妻戸むらさに藁座わらざさし出でて入れたてまつるに、⁽³⁾世の人の言へばにやあらむ、なべての御さまにはあらずなまめかし。これも心づか

ひせられて、ものなど聞こゆるほどに月さし出でぬ。⁽⁴⁾いと明し。古めかしう奥まりたる身なれば、かかるところに居ならば

ぬを、いとほしたなき心地するに、そのおはするところに据ゑたまへ。よも、先々見たまふらむ人のやうにはあらじ」とのた

まへば、「あやし。今宵のみこそ聞こえさすると思ひはべれ。先々はいつかは」など、はかなきことに聞こえなすほどに、夜も

やうやうふけぬ。

注(*)

藁座Ⅱ藁で編んだ敷物。

問一 傍線部(1)の和歌を現代語訳せよ。

問二 傍線部(2)の「生ひたる蘆」は、次の和歌の一部を引用したものである。

何事も言はれざりけり身の憂きは生ひたる蘆のねのみ泣かれて(『古今和歌六帖』)

これを踏まえて、傍線部(2)は女のどのような気持ちを伝えようとしたものか、説明せよ。

問三 宮の来訪を聞いてから宮を西の妻戸のもとに招き入れるまでの、女の心の動きを説明せよ。

問四 傍線部(3)(4)を、適宜ことばを補いつつ、それぞれ現代語訳せよ。